

住まいとコミュニティづくりNPO交流会

第5回

地域交流会 *in*小浜

～さまざまな歴史文化が往来してきたまちの魅力を探る～



開催日時：2018年5月26日（土）

13：00～19：00

開催地：福井県小浜市 まちの駅・旭座

主催／一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団

後援／小浜市

協力／NPO法人WACおばま

＜松崎晃治小浜市長ご挨拶＞

地域交流会を本市で開催していただき、ありがとうございます。地域コミュニティの活性化のためには、NPO法人、市民活動団体等の自主的な活動が不可欠であり、今回の交流会が、多様なネットワークの形成につながることを期待しています。



＜ハウジングアンドコミュニティ財団松本昭専務理事挨拶＞

地域交流会の趣旨、助成事業の実施経緯、後援していただいた小浜市及び協力団体への謝意などを述べました。



住まいとコミュニティづくり活動助成事業(地域・コミュニティ活動助成) 平成30(2018)年度助成対象団体の活動紹介

11団体のメンバーが、平成30(2018)年4月から平成31(2019)年3月までの助成期間で実施予定の活動内容を紹介し、各団体が抱えている課題について学識者や他の団体のメンバーからアドバイスや回答をもらいました。

NPO法人 西会津国際芸術村（福島県西会津町）

活動のテーマ：旧旅館の改修とバス停のリノベーションでまちなか交流拠点の創出

報告者：佐々木雄介さん

旧越後街道沿いの旅館をアートギャラリーに改修し、旅館の前にあるバス停と一体化して住民やバス利用者が集えるコミュニティスペースづくりを目指します。



NPO法人 ケアラーネットみちくさ（千葉県柏市）

活動のテーマ：空き家利用のケアラズ(介護者)カフェを活用した近隣住民にとっての居場所づくり

報告者：布川佐登美さん 梅川舞子さん

近隣の利用者が少ないカフェの玄関や庭の改修を利用者や住民参加型のWSで行い、地域に開かれたカフェの実現を目指します。



NPO法人 旧鈴木家跡地活用保存会（静岡県浜松市）

活動のテーマ：庄屋屋敷の再生による多様な人の交流拠点化

報告者：池田敏章さん

公園化される屋敷跡に残された弓道場の場を市民参加型で再生するとともに、ホームページなどで周知を図り、(歴史的な建物である)母屋再生への資金調達や将来の担い手づくりへ結びつけます。



つげ野の森市民ネットワーク・黒谷プロジェクト（愛知県新城市）

活動のテーマ：伝統建築の修復を通した学生への技術の継承と里山体験空間の創出

報告者：望月成高さん

県内の建築学科の学生に技術継承しながら旧家の忌門と蔵の再建・修復を行うとともに、屋敷の前面に整備した自然体験できる場も活用し、子ども塾とします。



NPO法人 しんしろドリーム荘（愛知県新城市）

活動のテーマ：地域での安住を支えるショーファー(お抱え運転)システムの社会実験

報告者：山本拓哉さん

高齢者の自由な移動の確保と運転事故の防止を図るため、高齢者の買い物や通院のために専用の運転サービスを提供するシステムの構築とモデル的試行を行います。



福知山ワンダーマーケット実行委員会（京都府福知山市）

活動のテーマ：空き店舗のリノベーションとレトロ商店街の活性化

報告者：庄田健助さん

福知山市の商店街で月1回開催しているマーケットの実績を基に、DIYで空き店舗を改修し、レンタルスペースの貸し出しで恒常的な賑わいの創出を目指します。



桃谷ロイター実行委員会（大阪府大阪市）

活動のテーマ：多様化した地域コミュニティの相互理解と交流の深化

報告者：伊藤千春さん 川口万喜さん 海野直さん

多様な歴史文化を有する生野地区で、地域情報誌の継続発行、イベント開催を行い、課題・ニーズ調査を通じて、地域に根差した新旧住民の交流や地域の課題解決策を検討します。



認定NPO法人 東灘地域助け合いネットワーク（兵庫県神戸市）

活動のテーマ：小学生のための寺子屋の場づくり

活報告者：村山メイ子さん

住民の要望を受けて御影市場の空き店舗を子どもの居場所(寺子屋)へ改装し、地域住民が先生となる寺子屋事業を展開し多世代の交流、こどもの安心・安全の確保を促進します。



ふるさとかかし親の会（兵庫県姫路市）

活動のテーマ：奥播磨かかしの里 展示施設の整備による過疎集落の活性化

報告者：岡上正人さん

姫路市の最奥部の集落で、「ふるさとかかしギャラリー」を整備し、かかしの展示・関連イベントの充実を図り、来訪者と住民の交流を促します。



鞆・暮らしと町並み研究会（広島県福山市）

活動のテーマ：鞆の町並みを後世に伝えるための人材育成

報告者：鶴岡智史さん

鞆の浦の町並み保存整備を進めるために、住民向けにかわら版の発行と学習会を行い、技術者向けに育成プログラムの実施とマニュアル及び保存指針を作成します。



八代宮地紙漉きの里を次世代につなぐ研究会（熊本県八代市）

活動のテーマ：400年の伝統を有する宮地和紙の保存・継承

報告者：磯田節子さん

和紙関連店舗の開店、大学との共同によるデザイン開発や工作イベント、周辺地域のまち歩き等を実施し、地域資源である宮地和紙の周知を図り、和紙の継承と保存、水路景観の保存を目指します。



会場内の様子



11回体のメンバーが抱えている課題に対して参加者からアドバイスをもらいました

地元住民、特に地元の若者に活動に積極的に関わってもらうにはどうしたらいいでしょうか。



理事／大月敏雄氏
(東京大学 教授)

県立高校の学生に地元の空き家調査に関わってもらっている地域があります。地元に着を持ってもらうことで、一度外部に出て地元に戻ってくる学生がいるようです。また、外部の若者をひきつけるには、「あご(食)・あし(交通費)・まくら(宿泊)」というキーワードが挙げられます。若者になるべくお金を負担させずに、地域に来てもらう工夫も必要ではないでしょうか。

地元住民と一緒に活動することが何よりです。また、楽しく活動するにはどのようにしたらいいのかを追求することで、活動が長続きするのではないのでしょうか。



選考委員
丁志映氏
(千葉大学 助教)

活動の次の担い手を確保するにはどうしたらいいでしょうか。



顧問／高見澤邦郎氏
(首都大学東京 名誉教授)

自分の経験から言いますと子育て系、福祉系、アート系など自分達の活動分野とは違う分野の他団体を支援・応援したことで(連携ではなく)、自分達の活動も継続できたように思います。次世代への引継ぎは同じことの継承ではなく、若い世代の価値観で開始した別のことを助け・見守り、一緒に楽しむようにしたいものです。

担い手の確保は全国的な悩みですが、就労との関係が重要ではないでしょうか。また、定住を目指すのか、交流人口を目指すのかによっても状況が変わってくると思います。



選考委員
寺川政司氏
(近畿大学 准教授)

活用物件のランニングコスト(維持管理・家賃等)の捻出をどうしたらいいでしょうか。持続的に活動するための収益化方策に悩んでいます。



選考委員
山下馨氏
(山下馨建築アトリエ 代表取締役)

思いでお金は生まれないので、マーケティング等ニーズ調査をすべきです。また、自分達だけでやらずに、多少時間はかかりますが周囲の協力者を得るなど、社会関係資本を構築すべきです。

L L PやL L Cなど新しい法人形態の検討もあるのではないのでしょうか。(丁志映氏)

最初のお金を確保する必要がありますが、建物を借りるのではなく、買うという選択肢もあると思います。家賃負担から開放されますし、法人で購入した場合は次の世代に相続も発生しません。



選考委員
関由有子氏
(せきゆうこ設計室 代表)

ある地域では、古い建物を若い人が借りて、自分達で直して掃除して十軒程度又貸している事例があります。組織化して生業になっているようです。戸数をこなせば経営的に成り立つのではないのでしょうか。(一般参加者)

地域通貨を使って活動推進を図りたいと考えていますので、アドバイスをお願いします。



評議員／小林郁雄氏
(兵庫県立大学 特任教授)

キャッシュを動かすのは大変ですが、地域通貨は原資が多くなって済みます。サービスの対価として払う側ももらう側も納得できるような仕組みがつけられるのであれば、チャレンジしてもらいたいです。

S N S 活用で情報発信を促進して社会的認知を高めたいので、活用ノウハウを教えてください。

I Tは浮き沈みが激しいです。現在はHPやFBはあまり注目されず、インスタグラムが効果的など、見極めも必要です。(山下馨氏)

伝建の町並みづくりをまちづくり組織として地元に着させるためにどのようなことが必要でしょうか？

ある地区の話ですが伝建地区外に高い建物が建つ可能性があり、海から船でアプローチした際などに景観的に問題になることが考えられます。こうした場合などは伝建地区の外側に高度地区を設けるなど、配慮が必要だと思います。(一般参加者)

活動に注力するために人件費の確保が課題となっています。

私たちは無償ボランティアで活動を開始しましたが、障害者部門で収益を得られるようになり、活動の次世代への引継ぎが見えてきました。(認定NPO法人東灘地域助け合いネットワーク／村山メイ子さん)

他地域の自治体などからののかしの設置依頼については、設置とともに自分達のP Rチラシを置かせてもらっています。また、商売で店に置きたいという依頼には、しかるべき金額をもらって活動の運営資金にあてています。(ふるさとのかかし親の会／岡上正人さん)

最後に、小浜市の前川昭彦企画部長より「小浜市でも少子高齢化が進み人口が減少し、自治体の財政も厳しい状況にあります。自治体が抱える問題に果敢に取り組む皆様のようなN P Oと良好な関係を築き、地域を良くしたいと考えます。成功事例を皆様につくっていただき、今後も学ばせていただけたらと考えます。」という感想をいただきました。



小浜のまちづくりと市民活動

1. 伝統地場産業「アブラギリ」の復活を通した地域コミュニティの場づくり

NPO法人WACおばま・NPO法人若狭暮らしに水舎 中嶋阿児

平成25・26年度に助成対象事業に採択された当時の内容とその後の報告をさせていただきます。舞台となるのは小浜市の「上根来」と呼ばれる中山間地域で、炭焼き・林業・畜産業などの地場産業が外国からの輸入材に押され衰退するなどして、現在は無住集落となっていて、かろうじて元住民たちが地域維持活動を継続しています。その地域に、内外関係なく「訪れる目的」を創出しようと「上根来里山再生プロジェクト」が生まれました。

これまでに、トレッキングコース開拓、ゲストハウスや休憩所の開設、豪雪地帯という地域性を逆手にとった雪室の設営、間伐材や竹材を使った伝統的工法による土留め柵のしがら組、そしてアブラギリの活用などに、元住民団体や地元産業高校などと協力して取り組んできました。

アブラギリとは、種子から「桐油」と呼ばれる油が採取できる植物で、不飽和脂肪酸を多く含む乾性油として主に工芸や工業分野に使用されてきました。若狭地方では江戸時代から栽培され、永らく全国でトップシェアの生産量を誇り、「若狭油」と呼ばれるまでの特産品でしたが、昭和の燃料革命によって安価な石油に取って代われ、現代では技術も文化も途絶えています。そのいっぽうで、上根来をはじめとする若狭地方一帯には、今も野生化したアブラギリの群生が広がっており、植生の単調化や林床植生の衰退など、環境問題へと深刻化している現状にあります。

この資源に目を付けたのが地元の若狭東高校の生徒たちであり、WACおばまがサポートしながらアブラギリの研究を行ってきました。実習授業に組みこんで、上根来での実の収穫作業、プレス機を応用した圧搾実験、桐油の撥水実験、きのこの原木栽培、葉寿司の商品開発などを行い、またその活動を広く市民に知ってもらうためのシンポジウムを同校で開催しました。ここまではH C財団助成事業になります。その後は、実は停滞期にありました。アブラギリの可能性を確かめることはできたものの、それらを製品にまで昇華する事業を描くには高校や中間支援の立場では難しかったのです。

そのため、平成29年度より「NPO法人 若狭くらしに水舎」が主体者となり、事業化に向けて引き継ぐこととして再スタートを切りました。小浜市の「里山創造計画」の策定に携わり、「アブラギリの活用」が計画の中に含まれ、行政との協力体制が進みました。

アブラギリ(桐油)は野生化して原料調達が不安定で、含油率が低い(含油率15%程度)ことから、少量生産高付加価値の戦略が望ましく、第一市場として「日本文化財」をターゲットに置きました。桐油は文化財の修復指定材料に含まれているものの輸入品で賄われています。文化財分野ではそういった資材を国産に切り替えていく流れがあるので、そこに桐油を乗せていく予定です。小浜市文化課・農林水産課の協力を得て、全国の文化財修復業者に取り組みに対するアンケート調査を行ったところ、ポジティブな反応が返ってきており感触は上々です。

今年度は、若狭東高校には桐油の品質を高める研究に切り替えてもらうとともに、成分分析、搾油を業者委託しての完成品に近い桐油の生産と市場へのサンプル提供による品質調査を行う予定です。

2. 小浜西組の紹介

小浜西組町並み協議会 大島洋一



江戸時代の小浜城下町のうち、町人が住んだ地域を「旧小浜」と呼んでいますが、そのうち西部の「小浜西組」は、江戸時代の街路や町屋(商家町・茶屋町)の地割がよく保存され、近世から近代に建てられた商家や茶屋、寺社など、商家町や茶屋町、寺町が併存する近世城下町の景観を今に伝えており、平成20年に重要伝統的建造物群保存地区に指定されました。

私は小浜西組の特徴として、面積が19haほどある、南北600m、東西800mほどの広い範囲であること、そこが普通の民家が建て込んだ地域であることがあげられると思います。大部分の住民は、観光客向けの商売をしているわけではなく、ただそこが自分の家なのです。

幅が狭く奥行きが長い町屋がびっしりと建て込み、地域の様々な行事や祭りが盛んな地域で、私たちは濃密な人間関係の中で暮らしています。そういった「暮らしの場」を重伝建指定することについて、多くの議論を積み重ねてきました。そして指定を受けてからも、地域住民の協働を大事にしながら、様々な取り組みを続けています。

今日はこれから一緒にまち歩きをしますが、いいところも悪いところも、素晴らしいところも残念なところも、余すところなく素顔の小浜西組を見ていただき、ご意見をちょうだいできれば幸いです。

旭座の歩み～行政と市民の協働の中での再生～



今回の地域交流会会場として使用した旭座は、明治2年建築、明治43年改築の芝居小屋で、大正期には芝居や歌舞伎、講演会・祝賀会などの集会施設として活用されていました。その後、昭和初期から戦後にかけて映画館として使用され、昭和32年から自動車修理工場、昭和39年から酒造店倉庫として使われたあと、空き家とし放置されていました。



移築前の旭座(平成24年)



旭座フォーラム

全国でも残り少ないこの貴重な建物を保存しようと、地元青壮年が「旭座再生の会」を組織し、小浜市やWACおばまなどの市民団体と協働して平成22年に実施した「旭座フォーラム」をきっかけに旭座再生の機運が高まってきました。

旧芝居小屋の多様な使い方を実践しようとジャズライブを毎年開催し、時には正面から「旭座はまちづくりの起爆剤となるか」というテーマを掲げてシンポジウムを開いたこともありました。



旭座ジャズライブ

こうした活動の中で、平成26年に小浜市指定文化財に指定され、平成27年からまちの駅の中核施設として活用するための移築・復原を行い、平成28年に竣工して今に至ります。



解体中の旭座(平成27年)

実は今回の地域交流会の後に行了いました交流会も、旭座の「使い方提案」のひとつでした。文化財ということもあり、飲食の場としての利用には一定の制限・抵抗もあったのですが、関係各位のご理解をいただき実現しました。花道を食材カウンターがわりに使ったのも初めての試みで、地域交流会の場をちゃっかり利用させていただいたともいえるでしょう。

これからも行政・指定管理者・市民が知恵を出し合って、旭座を大事に、しかし柔軟に活用していきたいと思っています。(NPO法人WACおばま理事長 鳥居直也)

ハウジングアンドコミュニティ財団について

ハウジングアンドコミュニティ財団(以下「本財団」)は、豊かな住環境の創造に貢献することを目的に、平成4(1992)年に財団法人として設立され、平成23(2011)年4月に一般財団法人へと移行しました。本財団では、世代を超えた良質な住環境をつくり、活力ある地域社会を構築するためには、市民の自発的な地域づくり・住まいづくりが不可欠と考え、このような活動を支援することを社会的使命として参りました。1993年から開始した「住まいとコミュニティづくり活動助成」のこれまでの助成対象団体数は378団体にのびります。

地域交流会について

市民活動団体の交流の機会を増やし他団体の活動の実態に触れることを目的として、助成対象地域(協力:助成対象団体)にて2014年から開催しています。

第1回(2014年)開催地:三重県伊勢市
第2回(2015年)開催地:新潟県上越市
第3回(2016年)開催地:兵庫県たつの市
第4回(2017年)開催地:広島県尾道市
第5回(2018年)開催地:福井県小浜市